

経営者「環境力」大賞シンポジウムin富山

事務局

環境文明21では、平成19年度に「21世紀の社会をリードする経営者の資格12項目」を作成し、平成20年度から『経営者「環境力」大賞』の顕彰発表会を行ってきました。平成22年度も、2月に実施される『第3回経営者「環境力」大賞』の発表を前に、高松と広島でのシンポジウムに続き、昨年11月30日に富山県立大学でシンポジウムを開催しました。ここでその概要を紹介します。

シンポジウムin富山では、パネリストに井林秀文氏（戸出運輸株式会社 代表取締役社長）、遊道義則氏（株式会社ユニオンランチ 代表取締役社長）、廣瀬 淳氏（株式会社公生社 代表取締役社長）をお招きし、経営者として環境力の視点をどのような事業場面で取り入れているかについて話して頂いた。パネルディスカッションでは、パネリストの方々に当会の加藤および藤村共同代表（コーディネーター）が加わり、12項目について各人の思うところを述べていただいた。



廃棄物処理業を経営する廣瀬氏は、12項目を環境力の資格というよりは自らの業務の『いろは』の『い』であるとし、その上で、「時代が変われば廃棄物の量も変わってくるし、リサイクルの手法も変わってくる。だから②「100年先を見通した企業価値」と⑧「事業を大きくしすぎない勇気」というのは難しいことではあるが、状況に応じて会社の形態を変えられる、あるいはタイミングを見計らえるような体制を整えたい」とコメントした。

遊道氏は、100年先はわからないとしながらも、人は食べなければ生きていけないから、食を提供する業者として考えていかなければならないこと、食品を作った人の顔が見えて、その人に感謝しながら、食べることが大切だとコメントした。

井林氏は⑧「大きくしすぎない勇気」について大いに賛成とコメントし、「経営者は場面によって大きくしすぎない方が良い、ビジネスチャンスの時など、経済の局面によって事業拡大の判断をすべき」と述べた。

また会場から⑩「人知の及ばないことに対する畏敬の念」についての質問に対して、加藤共同代表は、これは環境文明らしい項目の一つで、環境力大賞の応募者の中でも点数が高く、例えば、四国八十八箇所を回っている経営者が、ちょっとしたことで不幸は起こりうると感じるなど、人知の及ばないことに対して畏敬の念を抱いている人が多いとコメントした。さらにパネリストの方々も、新年には神社に祈願に行くなど、ご自身の行っていることについて述べた。

さらに別の参加者からは、身の丈に合った、己を知ることが今の時代には大事であるとの意見もあった。その上で、「厳しい言い方だが、企業は全てが生き残れないし、競争に勝たなければ意味が無い。その中で、ここにいる人たちは環境にも配慮されているというのが素晴らしいこと。そのような人々の底辺をいかに上げていくかが一番の課題だ」と述べた。